

No.	実施大学	授業科目名	担当教員	単位数	開講区分	曜日	予定回数	時間	実施場所	定員
64	杏林大学	外交政策論A	島村 直幸 総合政策学部 准教授	2	春	木	15	9:00～10:30	杏林大学 井の頭キャンパス	1～2

#### 【到達目標】

国際関係の歴史と現実について、関心と理解を深めることを講義の到達目標とする。

\*学位授与の方針との関連:この科目は総合政策学部が学位授与の方針において定めている終業時点までに獲得すべき能力として、(6)学際性の軸となる専門知識を養うことを目的としている。

#### 【授業の概要】

講義では、国際関係と外交について、主要なテーマを一つずつ取り上げ、歴史と現実に対する理解を深める。

外交とは、近代以降の主権国家の間で展開されてきた対外政策の術であり、世界政府が存在しない「無政府状態(アナーキー)」の国際社会では、第一義的には「国家の生存」のために「秩序の安定」を目的としてきた。しかし、現代の外交では、経済や開発、人権、環境といった問題領域や争点の重要性が、たしかに相対的に高まってきた。なぜなら、二度の世界大戦を経験し、核兵器が出現した現代の国際社会では、少なくとも大国間での戦争が勃発する蓋然性が著しく低下し、過去と比較すれば、安全保障や軍事力の重要性が相対的に低下してきたからである。

また同時に、国際的に相互依存が深化したことにより、戦争はますます起こりにくくなりつつある。国際社会で民主化や制度化がさらに進展していけば、戦争がやはり起こりにくくなる(はずである)という指摘もある。さらに、国際連合(国連)などの国際機関、多国籍企業、NGO や市民社会など、主権国家以外の行為主体(アクター)の重要性も、現代の外交ではたしかに無視できない。

しかし、国際システムが基本的に主権国家からまず構成され、システム原理が「無政府状態」であるという現実が根本から変化したわけではない。たとえば、国連はあくまでも主権国家の集まりであり、主権国家よりもより上位の権威、すなわち世界政府ではない。また、ヨーロッパ統合は、たしかに主権国家を乗り越える歴史的な実験を積み重ねてきたが、深刻な財政危機に直面し、今まさに歴史的な岐路に立たされている。

#### 【授業内容】

第1回:はじめに:国際関係論の基礎知識について学ぶ。[講義・質疑応答]

第2回:国際システム(そのもの)の変化:古代から中世へ、中世から近代へ、国際システムの変化を学ぶ。[講義・質疑応答]

第3回:大国間戦争後?:大国間戦争後の国際秩序はいかに安定するかについて学ぶ。[講義・質疑応答]

第4回:国際連盟から国際連合へ:国連が成立する過程について学ぶ。[講義・質疑応答]

第5回:国連システム:国連の仕組みと役割について学ぶ。[講義・質疑応答]

第6回:国連の国連軍・多国籍軍・平和維持活動(PKO):国連の軍事的な役割について学ぶ。[講義・質疑応答]

第7回:米ソ冷戦の歴史:米ソ冷戦の歴史を概観する。[講義・質疑応答]

第8回:緊張緩和(デタント)の歴史:緊張緩和の成立と崩壊について学ぶ。[講義・質疑応答]

\*以上の内容を予定しているが、実際の講義では変更がありうる。

\*課題に対するフィードバックの方法:毎回講義のはじめに前回の課題についてのフィードバックを行う。

第9回:軍備管理と軍縮の歴史:軍備管理と軍縮の交渉史について学ぶ。[講義・質疑応答]

第10回:日本の外交:日本外交をめぐる国際関係について学ぶ。[講義・質疑応答]

第11回:中国をめぐる国際関係:米中関係や日中関係の歴史について学ぶ。[講義・質疑応答]

第12回:朝鮮半島をめぐる国際関係:北朝鮮を中心とした国際関係史について学ぶ。[講義・質疑応答]

第13回:東南アジアをめぐる国際関係:ASEANの仕組みと役割について学ぶ。[講義・質疑応答]

第14回:欧州連合(EU):EUの仕組みと役割について学ぶ。[講義・質疑応答]

第15回:地球環境・人権・難民:地球環境と人権、難民の国際的な取り組みについて学ぶ。[講義・質疑応答]

#### 【成績評価方法】

定期試験(70点)と中間レポート(30点)を加算し、総合評価で算出する。

中間レポートは、教科書の序章と終章を読み、A4で2枚に要約する。締め切りは5月末まで。

#### 【教科書】

島村直幸『国際政治の<変化>を見る眼』晃洋書房、2019年

#### 【参考書、教材等】

島村直幸『<抑制と均衡>のアメリカ政治外交』ミネルヴァ書房、2018年

ジョセフ・S・ナイ(田中明彦・村田晃嗣訳)『国際紛争[原書第9版]』有斐閣、2013年

石井修『国際政治史としての二〇世紀』有信堂、2000年

佐々木卓也『冷戦』有斐閣、2011年

滝田賢治、大芝亮、都留康子編『国際関係学—地球社会を理解するために』有信堂、2015年

村田晃嗣・君塚直隆・石川卓・栗栖薫子・秋山信将『国際政治学をつかむ【新版】』有斐閣、2009年

野林健・大芝亮・納家政嗣・山田敦・長尾悟『国際政治経済学・入門[第3版]』有斐閣、2007年

山田高敬・大矢根聡編『グローバル社会の国際関係論』有斐閣、2006年

高坂正堯『国際政治』中央新書、1966年

馬田啓一ほか編『国際関係の論点』文眞堂、2015年

馬田啓一・大川昌利編『現代日本経済の論点』文眞堂、2016年

馬田啓一ほか編『グローバル経済の論点』文眞堂、2017年

滝田賢治編『21世紀国際政治の展望』中央大学出版会、2017年

須藤季夫『国家の対外行動』東京大学出版会、2007年

篠田英朗『国際社会の秩序』東京大学出版会、2007年

飯田敬輔『国際政治経済』東京大学出版会、2007年

鈴木基史『平和と安全保障』東京大学出版会、2007年

猪口孝『国際関係論の系譜』東京大学出版会、2007年

細谷雄一『国際秩序』中公新書、2012年

細谷雄一『外交』有斐閣、2007年

花井等・石井貴太郎編『名著に学ぶ国際関係論[第2版]』有斐閣、2009年

※ この授業は、4/9(木)が初回です。